

優 秀 賞

『パチンコを遊戯として

—スマートボールと屋台のような楽しさ—』

長谷 弥生 様

京都文教大学 総合社会学部 総合社会学科4年

目次

1.はじめに	- 15 -
2.新世界のスマートボール店	- 15 -
3.屋台としてのパチンコ	- 16 -
4.「遊戯」としてのイメージにすること	- 16 -
5.おわりに	- 16 -

1.はじめに

パチンコを利用したことのない人にとっては、悪いイメージが定着していると考えられる。例えば、金銭目的で利用しているような「賭け事」や、利用者や店員の印象が「こわい」などのイメージがある。特にここでは「賭け事」のイメージについて取り上げていきたい。というのも、利用者や店員にイメージを変えるのは店員自身が変化する必要があるからだ。利用者に対する接客の態度を改善することによって、利用者も変化してくると考えられる。しかし、「賭け事」というパチンコのイメージは、利用者や店員のイメージによって変化することではないと思われる。そのため、パチンコは「賭け事」ではなく「遊戯」という印象を抱く必要がある。そのため、いくつかの例を取り上げていき、イメージの払拭につながるよう考えていきたい。

2.新世界のスマートボール店

お祭りでよく見かける遊戯として「スマートボール」というものがある。これは、パチンコとピンボールを合わせたものもようにも思われる。玉をはじき、盤上に空いた穴に入れ、玉を増やしていく、という行為は類似している。しかし、ここで大きく違ってくるのは、お互いのイメージだと考えられる。スマートボールは、利用している側はもちろん、第三者側はそれを遊戯として見ていることが多いと思われる。これに対してパチンコは、利用している側は遊戯としてプレイしているが、第三者、特にパチンコ未経験者にとってはお金儲け、賭け事のように見えてしまうに違いない。その理由として、それぞれに対する認識にあると考えられる。大阪の新世界にスマートボールで遊ぶことができる店がある。ここでは、パチンコと同じように玉が少なくてもお菓子などの景品をもらうことができる。玉の数が多いほどより良い景品をもらうことが可能だ。自身、幼い頃よく両親に連れて行ってもらった（今は親がいても18歳未満は出入禁止となっている）。その時は、賭け事など考えたことがなく、「楽しい」と思っ

ていたのを鮮明に覚えている。このことから、「楽しく遊ぶ」ことができ、「景品をもらう」ことが目的として利用してもらうことが大切だと思われる。

3.屋台としてのパチンコ

パチンコを遊戯として見てもらうためには、幼い頃からの一つの遊び道具として扱っていくことも大切であると思われる。ここで自身が体験したことを例に挙げていきたい。大阪にある住吉大社へ初詣にいった時のことだ。そこでは、多くの屋台や出店が並んでいる。上記で述べたスマートボールも多く出店していた。その多くの屋台の中に、パチンコ台が5,6台ほど並んで遊べるような店があった。パチンコ店で使われていたと思われるもので、横から金銭を投入して遊ぶことができるものだった（いくら投入するのかわからない）。そこには、たくさんの子供たちが遊んでいたのを目にした。このことから、大人だけの遊びではなく子供も「楽しく」遊ぶことができると考えられる。

4.「遊戯」としてのイメージにすること

以上のことから、パチンコのイメージとして利用したことのない人に対しては金銭だけでなく景品をもらうことができ、楽しい遊ぶことができる場所としてのイメージを持たせることも大切である。例えば、子供用パチンコ店などを展開し、親子連れで来店してもらうような新たな遊び場をつくることもよいと思われる。子供を連れて来店できるカフェやイトインがあるパチンコ店もあるが、子供がパチンコをして遊ぶことができる場所はないだろう。また、利用したことがない人には、金銭の引き換えというやり方がなく景品の引き換えのみを行う店舗を展開する。そうすることで、ゲームセンターのような遊び場になると思われる。このように、「楽しく遊ぶ」ために様々な工夫を行っていくことが必要だと考えられる。

5.おわりに

現在、日本でカジノを設立する計画が進められている。そのため、よりパチンコが賭け事のイメージに移り変わっていくと考えられる。また、利用者自体が減少する可能性もある。今までのパチンコ業界から大きく変化していくことで、新しいパチンコ業界を築き上げていくことが可能と考えられる。